

# 巖谷小波と国定読本の編集

府川 源一郎

巖谷小波は、近代日本の子ども読み物の開拓者であり、最大の功労者である。子ども読み物の制作だけではなく、お伽芝居や口演童話などの幅広い児童文化活動にも先鞭をつけ、その発展に熱心に取り組んだことでも知られている。

その巖谷小波が「国語教科書」の作成に直接関与することになったのは、一九〇六（明治三九）年、彼が三六歳の時だった。『日本児童文学大系』第一巻の「巖谷小波集」の年譜欄には、次のような記載がある。<sup>1</sup>

二月、芳賀矢一の推薦により、文部省図書課の嘱託となり、以後二年間、国定教科書編集に参加する。週一回、図書課に通うのであった。

この年譜に記載された情報によれば、小波は第一期国定読本が公にされた後に、国定教科書の編纂作業に関わっていたことになる。しかしその詳細に関しては、これまで国語教育史研究、とりわけ国語教科書の歴史的研究の中で取り上げられることはほとんどなかった。以下、小稿ではその内実を探ってみる。<sup>2</sup>

## 一、国定読本編纂への参画

巖谷小波が、自身の読本編集の経験に関して触れているのは「国定教科書と童話」という文章である。これは、日本童話協会が企画した『総合童話題講座』の中の一輯として、一九三三（昭和八）年五月に公刊されたものである。<sup>3</sup>

一体明治四十年前後は国定教科書の改訂を要する時期であつたが、其の当時の文部省は、牧野伸顯氏が文部大臣であり、澤柳政太郎氏が次官であつて、非常に進歩した考へを有つて居り、此の機会に教科書を根本的に改造し、特に仮名遣を改革して、軟かい、容易しいものにしたといふ考へであつた。さうして、私がそれまでお伽仮名と称する特殊な仮名遣を自ら創始し、採用して居つた關係から、特に私を民間から抜いて編纂委員としたのである。其の私を推薦したのは、芳賀矢一氏で、上田万年氏も亦私を支持してゐた。而して省内の人としては図書課員として、吉岡郷甫氏、高野辰之氏などが居つて、大に私に共鳴し、喜んで事を共にしてくれた。而して読本の中で、童話がかつた、興味本位のものは私が担当し、理科、歴史其他に属する教材は、それ／＼専門の人が担当して、編纂事業に当たつたので、当時事を共にした人々には、森岡常蔵氏、御園生金太郎氏、保科孝一氏などがあり、会長渡部董之介氏の下に、毎週二回づつ、書いたものを持ち寄つて読会を開き、之を研究したのである。かくすること二年に及び所謂新仮名遣を徹底的に採用するつもりで、単語から之を始め、高等科の読本にまで着手した

ところで、一大障礙しょうがいにぶつかつた。(下略)

小波がなぜ国定読本の編集に招聘されたのかという理由と仕事の進捗状況がよく分かる。

この件に関する関係者の後年の証言として、次の二点がある。両者ともに、一九三〇(昭和五)年刊行の木村小舟編『小波先生 還暦記念』に掲載された文章である。関係箇所を引用したい。<sup>4</sup>

まず最初は、第一期国定読本の編集主任でもあつた吉岡郷甫きょうふの発言である。

(前略) 親しく言葉を交はすことの出来るやうになりましたのは、明治四〇年前後に亘つて、一所に国定教科書を修正するやうになつてからのことです。巖谷さんは毎週二日か三日か文部省に出勤されるのでしたが、読本の材料を提供していただいたり、批評していただいたりして、私共の利益するところは甚だ少くなかつたのです。読本の対話の言葉などが多少世話に碎けて来たのも其の頃からのやうに覚ええます。当時巖谷さんの提供された材料―文や歌―は、現行の読本や唱歌にも、多少は残つてゐるだらうと思ひます。(中略) 巖谷さんは又新しく御著作になつたものは、其の都

度持つて来ては下さいました。私は少し少年の読物にも筆を染めたことがあります、それは其の頃の巖谷さんの感化に出るものが多いやうに思ひます。(後略)

吉岡は、小波が第一期国定小学読本の「修正」作業のため文部省に「出勤」していたことを証言している。小波の記憶は「週二回」吉岡の記憶は「毎週二日か三日」で、両者の間に若干の食い違いはあるものの、小波が正式に文部省に勤務していたことが確認できる。さらにここからは、巖谷小波の仕事内容が、一九〇四(明治三七)年四月から使用され始めた『尋常小学読本』の修正作業だったことも確かめられる。なぜ『尋常小学読本』の「修正」が必要になったのかに關しては後述する。<sup>5)</sup>

続いて吉岡は、小波の影響によって、小学読本の会話文がこなれた表現に変化したことや、小波の提供した材料が「現行の読本や唱歌」(第三期国定読本『尋常小学国語読本』と文部省編纂『尋常小学唱歌』)の中に残っている、という注目すべき発言もしている。吉岡郷甫は、子どもの読み物や唱歌の実作者としての巖谷小波の仕事の評価した上で、その影響が国語教科書の上に及んだことを好意的に記しているのである。<sup>6)</sup>

次は、上田万年の弟子で東京高等師範学校教授の任にあり、専門雑誌「国語教育」を長く主宰した保科孝一の発言である。

(前略)これまでの君の活動は今更事新しく述べるまでもなく、世間には知られ過ぎて居るほど知られて居るのであるが、たゞ君の一大功績であつてあまり世に知られて居ないことは国語国字問題に対する君の献身的努力である。君は博文館時代にも歴史的仮名遣改定の必要を痛感し、雑誌にその意見を發表し、また實際に表音的仮名遣を実行されたことがある。国語国字問題を解決しなければ、国民教育の進展を期することが出来ないことも夙に自覚し、われ／＼とともに文部省において国定の国語読本編纂の任に当られたこともある。これは世人のあまり知らない事実である。君は国語読本の編纂について種々新しい経験を積み、その後少年の課外読物を編述するに当り、この経験から国民教育とつねに連絡を取り歩調を合わせることにふかく苦心されたことは周知の事実である。

君は今臨時国語調査会の委員として、国語協会の発起人として、国語国字問題の解決に終始不断

の熱誠を以て尽力せられて居ることはわれ／＼の特に君に感謝するところである。(後略)

この文章においても、小波が「文部省において国定の国語読本編纂の任に当られた」ということが「世人のあまり知らない事実」として紹介されている。保科にとつて巖谷小波は、なによりも国語国字改革の同志として評価されており、実際小波もその方面に関わるいくつかの文章を書いて公表している。二人の発言によつて、小波が国定読本の編纂作業に関わっていた事実が裏打ちされる。

一方、この二人の発言とは別な角度から、この時期の国定読本作成に関する証言も残っている。それは高野辰之のものである。<sup>7</sup>

一九三四（昭和九）年の八月号の『小学校教材研究』では、「国定教科書編纂懷古号」という特集を組み、それまでに国定教科書作成に様々な形で関わった一三名の人物の文章を掲載するという企画を立てている。国語教科書関係では、高野辰之、八波則吉、大岡保三の三名が寄稿した。そのうち巖谷小波に関して直接に触れているのが、高野辰之の論考である。

高野は「国定小学読本の追憶」という題名で、九頁にわたる長文の文章を寄せている。高野自身は、ほか

にも読本編集に関わる回想の文章をいくつか書いているが、その中でもこの「国定小学読本の追憶」がもっとも詳細なものである。ここから、巖谷小波に言及している部分を抜き出して紹介したい。

知られているように高野辰之は、第一期国定読本の作成に深く関わっていた。高野の記述によれば、第一期国定読本『尋常小学読本』と『高等小学読本』の編纂は、実質的には次の三名によつて行われたという。すなわち、その時文部省の編集主任だった吉岡郷甫、文部省嘱託の高野辰之、それに同じ嘱託で高等師範学校訓導だった笠原養二である。いわゆる「教科書疑獄事件」の直後で、国定の教科書を急遽作製しなければならぬという時間的にも物理的な困難な状況の中で、三名を中心にしてとにかく尋常・高等の二種類の小学読本は完成した。

しかし、少人数で短期間の内に完成させた読本（第一期国定読本）に対する評判は、必ずしも好意的なものばかりではなかった。教科書に取り上げた内容や題材に関してはいうまでもなく、文字表記や文章文体に関してもその拙劣さが非難された。

それを受けて、第一期国定読本の「修正」作業が慌ただしく始まった。このことに関して、高野は次のように記している。

(前略) 国定小学読本は直に修正に着手することになった。先決問題は仮名遣の棒引きを国語全般の上に及ぼすべきや否やのそれである。可否論はいろいろであつたが、棒に代へるのにうを用ひる程度がよからうといふのが、一般の輿論らしく、さういふ方針になつたが、これが又書き現しの上に大変革を生むのであつて、修正事業も容易ではない。(中略)(某氏が・府川注)「吉岡や高野ぢや、よく書ける筈が無い」と其処此処でいった。それなら一つ乗込んで書いて貰ひたいと当局から頼むと、「先づ巖谷小波に筆を執らせて見ろ」とのこと、お伽話の小波山人が囑託になつて来た。理科材料でも法政経済でも、もつと修身的の教材までも、此の人が立案しようといふのだ。前途以つて知るべしで、(後略)

この記述の遠景には、国語国字改良派と旧来派との対立が透けて見える。いうまでもなく、第一期国定読本『尋常小学読本』には国字改良派の意向が明確に現れていた。国字改良の理念を直接的に国語教科書に反映させようという方向は、上田万年や芳賀矢一を先鋒として保科孝一や文部官僚の沢柳政太郎などの改良派

である。教科書本文の作成を実際に担当した吉岡郷甫、高野辰之、笠原簑二も、当然のことながら、その理念に忠実に順つて国定読本を作成している。しかし、口語文体が洗練しておらず、また仮名遣いに関してもかえつて複雑になつていたことは否めない。

しかし巖谷小波が国語読本の編集に参画したときには、教科書を通して国語国字の改良を進めようとする方向は文部省内で堅持されていた。こうした状況下で小波に期待されたのは、国語国字改良の姿勢を保ちつつ、第一期国定国語読本『尋常小学読本』の教材文の内容や表現を学習者の小学生たちに適合したものに「修正」することだった。小波を招請した事情に関しては、小波自身の回想とも符合する。

もつとも、高野の「国定小学読本の追憶」における小波に対する視線や筆致はやや冷ややかである。それは、自身が快く思わない人物の推薦によつて小波が文部省に送り込まれたという経緯に起因するものだったかもしれない。だが、温厚で話し好きな性格の小波は、その仕事ぶりをも含めて文部省内では快く迎へられたようだ。そうした雰囲気は先ほどの小波自身の文章や吉岡郷甫の文章からもうかがうことができる。

## 二、まぼろしの「第一期改定本」

この先の経緯をあらかじめ先取りして述べておく。残念ながら、この時の小波の「修正作業」が第二期国定読本の上にそのまま全面的に反映されることにはならなかった。橋本淳治は、小波が修正作業に当たったこの読本のことを「まぼろしの第一期改訂本」と命名している。橋本は、小波等の努力にもかかわらず、それが「第一期改訂本」として公にされることなく埋もれてしまったことを「まぼろし」と称しているのである。橋本がそのように判断した根拠も、やはり高野辰之の「国定小学読本の追憶」の文章の記述にある。<sup>10</sup>

高野は、この第一期国定読本の「修正」作業に関して次のように記す。すなわち、『高等小学読本』は、吉岡郷甫と高野辰之とが執筆にあたった上、「尋常小学校用にも我等（吉岡と高野・府川注）は筆を執ったが、半分位は小波山人が書いたといつてもよかつた」と。この証言によれば、「第一期改訂本」の「尋常小学校用」の教材の大半は、小波の手によって間違いなく「修正」されたことになる。

小波自身は、先に掲げた回想の中で『尋常小学読本』の「修正」においては「童話がかつた、興味本位

のもの」を担当したと記していた。小波が選任されたのも、まさにそうした文章の作成に手慣れていると判断されたからだ。このまま作業が進捗して公刊されたなら、修正済の『尋常小学読本』は、さながら「小波読本」と呼んでもいい仕上がりを読本になったかもしれない。もつとも、自由に作品を書いて雑誌などに発表するのは異なり、形式や内容に大きな制約のある教科書教材作成の仕事は、かなり苦勞を伴うものであっただろう。<sup>11</sup>

ところが、読本の「修正」作業の途中で、教科書作成の方針に関する大転換がなされた。これが小波のいう「一大障礙」である。小波はそれが起こった根本原因として、内閣の交代を挙げている。つまり、一九〇八（明治四一）七月一四日、首相が西園寺公望から桂太郎に変わり、第二次桂内閣が成立したことである。この時文部大臣は、牧野伸顕から小松原英太郎に交代し、その下で岡田良平次官が「前内閣の進歩主義の施設を、片っぱしから打倒したが、国定教科書も其の犠牲となつて、従来の編纂方針を改め、仮名遣も在来の仮名遣に戻し、一切が逆転することになつてしまつた。左様なると私のやうなものには御用がないといふことになつた」と、小波は前掲の「国定教科書と童話」の中で述べている。実際、文部次官岡田良平は、

これまでの文部省行政の方向に反発して、保守的な姿勢で文部行政を進めたようだ。このような文部省の方針変更は、<sup>12)</sup> 国定読本の「修正」作業にも大きく影響してくる。

まず一つ目は、学校制度全般に関わるものである。尋常小学校の年限がそれまでの四年から六年に延長されることになった。政府は、義務教育期間の延長を図ろうとしたのだった。もっとも、年限延長の問題は、一九〇〇（明治三三）年の「小学校令」以来の懸案であり、文部大臣の交代と直接の関係はない。義務教育期間延長は、日清・日露戦争を経て国民教育の必要性が強く意識され、先進国としての日本の地位の向上が問題になってきたことが背景にある。国民の教育に対する意識も高まり、明治四〇年には小学校への就学率も男女共に九五%を越えたことも、義務教育を延長する大きな機運になった。

一九〇七（明治四〇）年三月二一日には、勅令第五二号として「小学校令中改正」が示される。その第一八条に「尋常小学校ノ修業年限ハ六箇年トス 高等小学校ノ修業年限ハ二箇年トス但シ延長シテ三箇年ト為スコトヲ得」とあり、実施は翌年の一九〇八（明治四一）年の「四月一日ヨリ施行」することになった。それまで「尋常小学校」で使用する国語教科書

（読本）は、四年間分（上下八冊）だったのが、六年間分（上下二冊）を用意しなければならなくなったのである。「高等小学校」の国語読本についても同様で、二年間分、ないしは三年間分の用意が必要になる。それに対応するためには、直ちに新しい制度に合わせた国定教科書の準備に入らなければならない。これは、読本の「修正」作業とも直接に係る問題である。

二つ目の方針の転換は、「仮名遣い」の問題だった。読本編集においては、どのように言語形式を取り扱うかがきわめて大きな問題になる。この時、国語の教科書の「仮名遣い」や「字体」および「学習漢字」に関しては、一九〇〇（明治三三）年の「小学校令施行規則」の規定に拠っており、「仮名遣い」は、表音派が主導したいわゆる「棒引き仮名遣い」を採用していた。検定後期に民間書肆の発行した各種の国語読本も、また第一期国定読本『尋常小学読本』も、基本的にこの規定に準拠して作成されている。すなわち、仮名遣いに関しては、字音語（漢語）が表音式、和語が歴史的仮名遣いで編纂されていたのである。

一九〇五（明治三八）年、文部省は次期の国定教科書は、「国語調査委員会」の諮問をもとに、漢語、和語ともに表音式仮名遣いを採用することを決定してい

た。したがって第一期国定読本の「修正」も、当初この方針に沿って進められる予定だった。その文脈の中では、表音派を標榜するお伽作家小波の起用は、きわめて適切な人選だったことになる。

しかし、表音式仮名遣いを全面的に実施することには、反対の声が湧き上がる。例えば一九〇六（明治三九）年には、貴族院において読本の表記を「歴史的仮名遣い」に戻そうという動きが高まり、「国語擁護会」等が中心となって、国語国字改革にブレーキがかかった。そうした流れが主流になるのは、一九〇八（明治四一）年に文部省の諮問によって設置された「臨時仮名遣調査委員会」の席上である。同年六月から五回にわたって開催された委員会の議論の中で、教科書の表音的仮名遣いを捨てる方向が決定的になった。すなわち新しい国語読本の仮名遣いは、「臨時仮名遣調査委員会」の議論に従い、旧来方式である「歴史的仮名遣い」を、全面的に採用することになったのだった。<sup>13</sup>

さらに教科書の内容に関しても、変化が要求される。日清・日露戦争後の資本主義経済の興隆の中で、世間には社会主義的な思想も広がった。政府はそれに対抗すべく、国家主義的施策を強力に展開する。そうした動きの中で、一九〇八（明治四一）年一〇月に出された「戊申詔書」は、この後の教育内容にも大きく

影響を与えた。この「詔書」の内容は、保守的・伝統的な価値観を墨守し、国家主義的な観点から個々人の道徳的な覚醒を促すものである。当然のことながらそれは、新しく編纂される国定読本の教材内容にも波及する。

高野辰之は、新編の第二期国定読本の内容と小波の行った教材の「修正」作業の帰結に関して、次のように記している。

曩に吉岡君と共に立案したものは十に六七は採用されて、わづかに古典味が増加しただけだが、国民性涵養といふ美しい表現で、それを説明しなければならなかつた。用語の古雅は程度を高めるといふ説明の下に世人に諒解せしめなければならなかつた。最早小波山人の立案なんかは浅薄と認められて、ただの一文も採用されなかつた。（中略）これも明治四十二年の一月には、尋常小学用十二冊、高等小学用四冊が完成して、進んでは複式編成用の読本編纂に従事することになった。秋季始業の読本をも編纂することになって各四冊を編纂した。

国定読本を通して、平易で庶民に分かりやすい言語



表現を提供しようという表音派の目論見は、頓挫したものである。「小波山人の立案なんかは浅薄と認められて」という文言は、そうした事情が背景にある。

新しく編集される国定読本には文語文が復権し、古典的な内容の文章が重視されるようになった。明治四三年度から使用された第二期国定読本『尋常小学読本』が、その結果物である。高野辰之は行きがかり上、この読本の起草にも関わったが、巖谷小波は新しい読本の編纂に直接関与することはなかった。

### 三、文部省による「教材公募」への参画

巖谷小波の文部省における仕事は、国定読本の教材文を自身で執筆することだけではなかった。読本作成の一環として文部省が行った「教材公募」にも、小波の協力が要請されている。「教材公募」が行われるのは、読本の作成に際して多様な教材文の作成が必要であり、それを文部省内部の執筆者だけで行うのには限界があったからだろう。教材公募の試みは、過去にも前例があり、教科書国定化をめぐる菊池大麓文部大臣の演説の中でも教科書教材の「懸賞募集」の話題が登場している。教科書が国定化されても、一般から広く材料を公募しようという文部省の姿勢は、限定的では

あるもののこの後も引き継がれていく。<sup>1</sup>

第一期国定読本刊行後の一九〇六（明治三九）年、文部大臣官房図書課は、高等小学読本の教材公募に踏み切る。この時の教材公募は、「高等小学校第四学年用国語読本」に掲載する「新体詩」に関するもので、歌題（教材名）も「進取ノ歌」とあらかじめ決められていた。ピンポイントの教材公募である。「歌詞ハ四句又ハ六句ヲ以テ一節トシ総計三十二句以内トス 但シ句ハ七五調七七調其他何レヲ採用スルモ可ナリ」と文量にも規定があった。

「官報」で募集を開始したのは一月であるが、応募者は八〇〇名を越え、その審査の結果は同年の四月の「官報」に掲載されている。審査を担当した委員名も公表されており、文学博士上田万年、巖谷季雄（小波）、坂正臣、渡部董之介、吉岡郷輔、佐々木信綱、森岡常蔵の七名だった。小波が参画しているのは、この教材公募が、彼に期待されていた「国定読本の修正」作業と一つながりのものだったからだろう。<sup>15</sup>

さらに文部大臣官房図書課による教科書教材の懸賞募集は続く。一九〇七（明治四〇）年二月四・五日の「官報」には、「物語懸賞募集」の要項が掲載されている。そこでは、「適宜ノ題ニ就キ仮作セルモノニシテ或ル教訓ノ意ヲ遇シ児童ノ感興ヲ惹クニ足り高等小学

読本卷一乃至卷八に掲載スルニ適スル」教材を求めている。文体は「口語体（言文一致体）」で、「創作二限ル」とし、文章量は「三三〇〇字以内」、三月一〇日を締め切りとし、やはり今回も賞金が提示されている。文部省では、「修正中」の「高等小学読本」に関する口語体の教材文を必要としていたのである。

この時の「物語懸賞募集」の審査結果は、同年四月九日の「官報」で公表された。応募総数は五九三篇にのぼり、条件に適合しない八一篇を除いた五一二篇が審査の対象となったという。審査委員は、文学博士上田万年、文学博士芳賀矢一、幸田成行（露伴）、巖谷季雄（小波）、渡部董之介、吉岡郷甫、森岡常蔵である。今回も、小波の名前が審査委員として挙げられている。審議の結果、最優等が一篇、それに次ぐ作品が一篇、佳作一二篇が選定された。<sup>16</sup>

ところで、この一四篇の当選作は、一九〇八（明治四一）年三月に出版された『教訓仮作物語』の中にすべて収録される。この書籍は、各話ごとに色刷りの挿絵が一枚ずつ挿入された四六判ハードカバーのしゃれた造本で、定価は六〇銭、発行所は国定教科書共同販売所。「緒言」には、「此物語ハ素ト高等小学読本ノ材料トシテ懸賞募集シ」とあり、文部大臣官房図書課が一年前に行った「物語懸賞募集」で当選した応募作を

まとめ一書にしたことが明記してある。また、「而シテ此中（応募作品中・府川注）ノ数篇ハ読本ニ収ムル見込ナレドモ、尚大イニ節略修正ヲ加ヘザルベカラズ。依テ此際別ニ巖谷季雄ニ託シテ些少ノ修正ヲ加ヘシメ、一冊ニ取纏メテ刊行スルコトナセリ。」とも記してあった。小波は審査を担当しただけでなく、応募作の文章を整えて一書として刊行する作業も担当していたのである。<sup>17</sup>

なぜこの時点で当選作が『教訓仮作物語』という書物として公刊されたのだろうか。この時の「教材公募」の応募作品の中には、最優等だった武田頼の「競馬」のように国定読本の教材として登載された文章もある。武田の作品は、文章を簡略化した上で、一九一〇（明治四三）年度から使用された第二期国定国語読本『尋常小学読本』の「巻九」に掲載された。さらにこの教材は引き続き第三期国定読本『尋常小学国語読本』の「巻八」にも掲載されて、国語読本の教材として長く読まれ続けることになる。

だが、武田の「競馬」も含めて『教訓仮作物語』に掲載された一四篇の作品は、もともと「高等小学読本」の教材として公募された作品である。それにもかかわらず、「競馬」は「尋常小学読本」の教材に転用されている。もちろん、尋常小学校の年限が四年から

六年に変更されたので、高等小学校用として公募した作品を尋常小学校用として流用したに過ぎない、と考えることもできる。

しかし、別の可能性もある。それは、「競馬」を尋常小学校用教材に流用したのは、文語体を多く掲載する方向にかじを切った新しい高等小学校用読本には、「口語体（言文一致体）」の教材文を入れる余地がなくなつたからだ、と考えるのである。さらにいうなら、この時に『教訓仮作物語』という書物を公刊したのもつとも大きな理由は、そのことと深く関係していたのではないか。つまり、新しい『高等小学読本』に掲載すべく教材を公募して一四篇の口語体の作品を集めたものの、それらを活かした教科書編纂が難しくなつた、死蔵しておくのも忍びないので、せめて別の形で公表したい、それで公募作品を単行本として公刊することにしたのではないか。なぜなら、方針を変更した『高等小学読本』には、それほど多くの口語体の教材を掲載する必要はないからである。もしそうだったとすれば、小波は敗戦処理的な役回りを引き受けさせられたことになる。

さらに文部省による教材公募は、一九〇八（明治四一）年六月にも行われている。この時に公募を実施したのは、小波がすでに嘱託ではないので、子ども向け

の韻文教材の制作者が不足したからという理由からかもしれない。「官報」では、「新体詩懸賞募集」というタイトルで「小学校用国語読本又ハ唱歌教科書」の教材公募が実施され、その結果は同年一二月に「官報」に「審査報告」として掲載されている。この時の応募作品のいくつかは、第二期国定読本の韻文の教材として実際に使われており、この後も引き続き国定教科書や唱歌教科書の定番となつた教材もある。この教材公募の際にも、小波は審査委員を担当していた。<sup>18</sup>

#### 四、国定読本に残された巖谷小波の作品

こう見てくると、二年間の小波の国定読本への関わりは、徒勞に終わつたように思えなくもない。というのも、高野辰之が「最早小波山人の立案なんかは浅薄と認められて、ただの一文も採用されなかつた。」と断定しているからだ。一方、吉岡郷甫は、「当時巖谷さんの提供された材料―文や歌―は、現行の読本や唱歌にも、多少は残つてゐるだらうと思ひます。」と述べている。前者は第二期国定読本中に小波の仕事の痕跡はないといい、後者は、小波の仕事は国定読本に残っているという。二人の発言の間には相違があるように見える。実際はどうか。

小波自身は、先に挙げた「国定教科書と童話」の「〔仮名遣いの変更されたので・府川注〕左様なると私のやうなものには御用がないといふことになつた」という記述に続けて、次のように書いている。

気の毒なのは芳賀矢一氏で、同氏が太急ぎで教科書を書き直さなければならぬといふことになつた。何分単語からして新しい仮名によつてゐるのであるから、単に文章を直すだけではすまぬので、一通りの骨折ではなかつたのである。ただし、その材料はわれ／＼の作つたものを用つたので、内容は同じであるが形がかはつて出来たのである。（後略）

新しい国定読本の仮名遣いが確定した後、一九〇八（明治四二）九月に、教科用図書調査委員会が発足し、起草委員として芳賀矢一、乙竹岩造、三土忠造、それに補助として高野辰之が選任された。すでにここには巖谷小波は参画していない。また、表音派の保科孝一も岡田正美もいないし、第一期国定読本を取りまとめた吉岡郷甫も関与していなかった。芳賀矢一が上置きとなり、実務担当として高野辰之が残された。新しい読本の編纂作業は、このメンバーを中心に同年一〇月

から開始され、一九〇九（明治四二）年一月初旬に原稿が完成する。それは第二期国定の「尋常小学読本」として、一九一〇（明治四三）年の四月から学校現場で使われたのである。（『高等小学読本』は一年遅れだった。）

小波が、第二期国定読本の教材に関して主張しているのは、こういうことである。すなわち、仮名遣いだけは表音式から歴史的仮名遣いになつたものの、「材料はわれ／＼の作つたものを用つたので、内容は同じであるが形がかはつて出来た」と。小波は第二期国定読本の材料（内容）に関しては、自分たちの用意した草稿がそのまま使われているというのである。

また小波は、この発言に先立つ一九二〇（大正九）年に刊行した『我が五十年』の中でも、「文部省からは教科書編纂員を囑託されて、一週間に一日宛図書課へ出る事になつた。その後仮名遣復旧の都合で又改訂になつたが、今自家の子供等の使つて居る読本の中には、私の書いた物がちよい／＼出て来る」と、自分の仕事国定教科書に反映していると述べている。<sup>19</sup>

もちろん小学校用の国定国語教科書に掲載される教材文は、基本的には無署名であり、たとえ書き手が判明したとしてもその著作権は文部省にある。つまり教科書の教材は、個人の著作物ではない。したがって、

個々の教材を誰が執筆したのかを詮索することは、あまり生産的な作業ではないかもしれない。また、たとえ書き手が特定できても、その文章は多くの人の手によって推敲に推敲が重ねられており、原形を留めていない可能性さえある。

しかし、第二期国定読本の公的解説書である「修正国定教科書編纂趣意書」にも、「明治三十七年四月以降使用シタル国定読本及び三十七年以後文部省内ニテ起稿セシ修正原本ヲ基礎トシ」と記されている。第二期国定読本が、第一期国定読本の「修正本」である以上、すべての原稿をまったく新しく最初から作成し直したわけではない。高野も「吉岡君と共に立案したものには十に六七は採用されて、わずかに古典味が増加しただけ」といつていた。高野が吉岡と「修正」した読本の材料は、第二期国定読本に活用されているのである。したがって、「小波山人の立案なんかは浅薄と認められて、ただの一文も採用されなかった。」という発言も、表音式仮名遣いを採用した文章形式の側面に關して述べただけだと解するべきなのではないか。つまり、教材の材料（内容）について言及したものではないと考えるべきなのだ。さらにここでは、高野が小波に対して一貫して冷やかな姿勢であったことも考慮に入れて置く必要がある。

編纂趣意書がいうところの「三十七年以後文部省内ニテ起稿セシ修正原本」、つまり小波の関与した「修正本は、橋本によって「まぼろしの第一期改訂本」と命名された。そのままの形でそれが公にされたわけではないという意味では、「まぼろしの」という修飾節はきわめて適切であり、筆者も第二章のタイトルとして借用した。だが、高野の「ただの一文も採用されなかった」という証言を、小波の「修正」作業した原本がまったく無視され黙殺されて一切顧みられことはなく、第二期国定読本には小波の修正作業の痕跡さえ残っていないと解釈するべきではないだろう。

そもそも、小波が読本の文章作成に協力したとするなら、伝説や昔噺などの材料を持ち込んだのではないかと想像するのは、自然なことである。第一期国定読本では、韻文・童話・物語などの文学的な教材が、それまでの検定期民間読本と比べて激減した。それは話しことばを重視して、口語文を積極的に導入したことによるものだが、それゆえに公刊後は文章の完成度が厳しく問われた。また、民間検定読本の中で定番になりつつあった「昔噺」が、第一期国定読本から姿を消してしまったことも批判を受けた。

そういう状況下で、「日本昔噺」シリーズの作者である巖谷小波が編集に参加したのである。小波は子ど

もたちが昔噺や伝説などの読み物を好んで受容していることをよく知っていた。第二期国定読本で、昔噺や伝説が増加したのは、小波による国定読本の「修正」作業の結果ではなかったか。

このことに関して、『日本口演童話史』の「巖谷小波」の項では次のように記している。「文部省国書課の嘱託として、約二年間、国定教科書の編纂に従事した。ことに『桃太郎』を始め日本昔話を文部省として、現代にマツチする形に改めたことは大なる功績といわなければならない。」と。この情報には根拠が示されていないので、真偽を確かめることはできないが、多くの識者の見方と重なるように思える。<sup>20</sup>

第二期国定読本巻一の「モモタロウ」の言語表現に限定するというなら、「クルマ ニ ツンダ タカラモノ、イヌ ガ ヒキダス エンヤラヤ。サル ガ アト オス エンヤラヤ。……」と、リズムカルな文体が採用された。これは、検定後期の民間の国語教科書に収録されていた従来の「桃太郎」の教材文と大きく異なっている点である。第二期国定読本に昔噺を復活登載したと併せて、こうした表現は、小波による「修正」の痕跡だと考えることができるのではないか。

また、第二期国定読本の巻三の二四課・二五課には「ウラシマノハナシ」が掲載されている。第一期国定

唱歌教科書『尋常小学唱歌』の第二学年用にも「浦島太郎」がある。国文学研究では、これらの浦島譚のストーリーの骨格は、小波の「日本昔噺シリーズ第一八編の「浦島太郎」と同じであることが指摘されている。巖谷小波の手によって、『万葉集』以来の「浦島子」の話が「近代的」な「お話」に書き替えられ、それをベースにした第二期国定読本の教材文や『尋常小学唱歌』の歌詞などが、標準的浦島太郎の話として一般に浸透していくという見解が通説なのである。<sup>21</sup>

さらにこれも実際に小波が執筆した教材かどうか正確にはわからないが、第二期国定読本巻一〇第九課の「冬景色」は、小波の文章だと伝えられている。それは芦田恵之助が著した『読み方教授』に、この教材の授業記録が載せられており、そこに併載された児童作文のなかに「作者はあのお伽噺で名高い巖谷小波さんであるといふことだ」という記述があるからだ。<sup>22</sup>

芦田恵之助は当時、東京高等師範附属小学校に勤めていた。おそらく、国定読本作成の内情を知る立場にあった芦田が、第二期国定読本掲載の教材「冬景色」を巖谷小波が書いたという情報を、直接、教室で、子どもに伝えたのだろう。それを耳に止めた児童が、そのことを自分の文章に書き込んだ可能性はある。

これらとは別に、小波の文章は明らかに国定読本に

掲載されている。それは第二期国定の『高等小学読本』の中である。この読本には、趣味的文学的な文章感覚を高めるために、いわゆる名家の文章が著者名を付して掲載されていた。「第三学年用上下」には、「峠の茶屋（夏目漱石）」「干潟の舟（幸田露伴）」「田舎と偉人（三宅雪嶺）」「秋（森鷗外）」「鎌倉一見の記（正岡子規）」などの当代一流の作家の文章が並べられているのだが、それらに混じって、巖谷小波の「西航記」も教材文として取り上げられている。小波は、国定読本の中で一流の文章家として処遇されていたのである。このように小波による文筆活動の痕跡は、様々な形で国定の『小学読本』の中に残されているように思われる。

\*

以上見てきたように、この時の巖谷小波の国定読本の編纂作業への参加は、読本の表音的仮名遣いを進展させるモメントにはならなかった。むしろ仮名遣いに関しては、旧来の歴史的仮名遣いに戻ってしまった。表音式お伽仮名の使用を主張する小波にとって、そのことは残念だったに違いない。しかしそれは、政治的・文化的な大きな力が働いたからであって、小波個人の力不足というわけではない。むしろ、小波の参加

によって、子どもの興味に適合した内容の教材を用意する道筋をつけることはできたのである。またそのことによって、間接的ではあるにせよ、言文一致体による平易で子どもの関心を惹く読み物に対する学習者の欲求を掘り起すことにも繋がったのではないか。

そうした動きは、やがて大正自由主義教育の中で、子どもの内発的な想像活動や観察活動に根差した自己表現を求める動きの基盤になる。そこでは児童自由詩や生活綴方のリズム文体などが生まれ、それがまた新たな子どもたちの内面をダイナミックに形成し続けていくのである。

こうして国定読本は、大正期に入ると、自由主義的な文芸運動に影響を受けた多様な言語表現をどのように取り上げるのかという問題と無縁ではいられなくなる。世間ではすでに「お伽噺」や「新体詩・唱歌」とではなく、「童話」や「児童文学」あるいは「童謡・自由詩」が子どもたちの心を捉え、大人たちもそれを支持する時代に変わっていた。「巖谷小波と国語読本の編集」の問題は、そうした大きな文化の流れの中に位置づけて考えていかなければならないだろう。

（二〇二二年二月五日・稿）

二点である。

1 『日本児童文学大系 第一巻 巖谷小波集』ほるぷ出版

一九七七（昭和五二）年十一月、四二二頁。「年譜」は桑原三郎が担当した。同様の記述は、巖谷大四『波の発音（おと）』

巖谷小波伝―新潮社 一九七四（昭和四九）年、一八二頁にもみえる。

2 現在、「小波日記研究会（白百合女子大学児童文化研究センター）」により「巖谷小波日記」の翻刻が行われており、明治三八年八月までの分が『白百合女子大学児童文学研究センター研究論集』第二三号 二〇二〇（令和二年）三月、に活字化されている。今後さらに翻刻が進めば、読本編修の実態がさらに明らかになる可能性がある。

3 巖谷小波「国定教科書と童話」「童話教育」（総合童話大講座）日本童話協会出版部 一九三七（昭和一二）年に再録された。久山社から復刻された『童話研究（19）童話教育』にも収録されている。初出は、一九三三（昭和八年）五月。

4 木村小舟編『小波先生 還暦記念』一九三〇（昭和五年）。冒頭に出世作の「こがね丸」の本文やそれに関係する資料を掲載した後に、「名家感想集」として各界から一〇五名が文章を寄せている。吉岡郷甫（女子高等師範学校校長）と保科孝一（東京文理科大学教授）もそのうちの

5 もっとも、「注19」の『我が五十年』では、「週一日宛図書課へ出る」となっている。

6 吉岡郷甫が『小波先生 還暦記念』に原稿を寄せた一九三〇（昭和五）年の時点で、小学校において以下の教科書が使われていた。すなわち「国語」は、一九一八（大正七）年度から年次ごとに刊行された『尋常小学国語読本』（第三期国定国語教科書）であり、「音楽」では、一九一

7 この資料に関しては、橋本淳治の「文部省図書監修官の編纂趣意書論文・講演要旨目録―教育雑誌掲載記事を中心として」という労作から情報を得た。橋本の論考は、中村紀久二編『復刻版 国定教科書編纂趣意書 解説・文献目録』国書刊行会 二〇〇八（平成二〇）年九月、に集録されている。橋本は、この論考を作成するにあたって、教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（全一〇一巻、日本図書センター、一九九二～一九四）を悉皆調査して関連論文を探索し、そのほか『文部時報』『小学校教材研究』『現代教育』『実践国語教育』『研究評論歴史教育』『地理歴史教育』『信濃教育会雑誌』を確認したという。労作と称した所以である。

8 高野辰之「国定小学読本の追憶」『小学校教材研究』第二巻第八号 一九三四（昭和九年）八月。一四～二二頁。



高野が「快く思わない人物」は誰なのか。高野辰之は直接人物名は記さずに、揶揄するような表現のみを残している。小波を文部省に推輓したのは、芳賀矢一のような人物だが、高野は芳賀矢一に対して尊敬を込めて博士と尊称して感謝の言葉まで述べている。したがって、それ以外の人物であろう。熱血漢の高野辰之に反発する人物は、当時もかなりいたようだ。当該人物は、おそらく第一期国定読本の編纂者に選ばれたものの、実際の執筆にはほとんど加わらなかったらしい「保科孝一」ではないだろうか。その傍証として、保科孝一の著書『国語問題五十年』三養書房 一九四九（昭和二四）年九月 九〇頁の次のような記述を挙げてもいいだろう。そこには、「明治三十七年教科書が国定になったので、文部省図書課でこれを編修することになって、巖谷小波・武嶋羽衣・岡田正美・吉岡郷甫とわたくしが編纂委員にあげられた。」と、ある。ここには第一期国定読本『尋常小学読本』の編纂者として、最初に小波の名があげられている。しかし実際には、小波はここには参加していない。時間的にはずいぶん前の出来事なので、保科が混同した可能性もある。また、そこに編集主任の吉岡の名はあるが、実際に教材の作成に奮闘した高野辰之と笠原義二の名前はない。意図的ではないかもしれないが、ここに保科の高野に対する評価が現れているようにも見える。

橋本は注4の文献の中で、「まぼろしの第一期改訂本」という表現を使用している。ここではそれを借用した。本文中でも触れたように草稿を、第二期国定読本の刊行と同時に国定教科書共同販売所から刊行された『修正国定教科書編纂趣意書 第一篇』の「尋常小学読本編纂趣意書」「第一章 緒言」では、「明治三十七年以後文部省内ニテ起稿セシ修正原本」と呼称している。

「小波君はいちはやく児童文学に手をつけていたのであるが、教科書の文章には、いろいろな制約があつて、思うように筆が運ばないので、小波君も教科書の文章はなかなかむずかしいものだといっていた。」児童雑誌や児童読み物では、書き手が取り上げる題材や文体、表記などを比較的自由に選べるのに対して、教科書では表現形式では漢字や表記、文体など、また表現内容でも多くの縛りがあるので、さすがの巖谷小波も教材文の執筆には苦労したことがうかがえる。注3の「国定教科書と童話」では、巖谷小波自身が同様の苦心を述べている。

が幾分急進的な傾きがあつたので之に対する桂内閣全体の政治方針は、余程反動的傾向を帯びてゐた。小松原文

相並に岡田次官の教育に対する保守的態度も、畢竟其の影響を受けたものとみるべきであらう。」という記述がある。本書は、題名からも想像できるように、基本的に岡田を顕彰する姿勢で書かれているが、ここでの岡田の「保守的態度」は、結果的に小松原内閣の方針を遵守したからだという説明になっている。小波のいうように、小松原文相と岡田次官は、西園寺内閣の牧野文相時とは異なった「保守的」な施策を展開したのである。

13 柿木重宜「明治後期の国語教育における言語学者藤岡勝二の言語思想の影響について―「棒引き仮名遣い」の成立と消失を巡って―」第一三九回全国大学国語教育学会 二〇二〇（令和二）年一〇月三十一日（紙面発表）、の中で「たった五回の委員会で、当初の文部省が提唱した表音主義が、歴史的仮名遣いに転換されたのではなく、『明治三八年二月假名遣改定案ニ對スル輿論調査報告』の調査結果の後、予想以上に、反対者が多いことが判明したため、委員会成立以前に、「棒引き仮名遣い」の廃止を前提としていたのではないかと（発表者の柿木は・府川注）と考えている。臨時仮名遣調査委員会は、「結論ありき」の形式上の委員会と（柿木は・府川注）みなしているのである。」事態が柿木の推測の通りだとすれば、小波が文部省の読本の修正作業に加わった時点で、すでに「表音派」の勢いは後退していたことになる。その結果、文

部省は「文部省令第二六号」で小学校令施行規則を改正した上で、「明治四一年九月文部省訓令第一〇号 小学校令施行規則中教授用仮名及び字体、字音仮名遣並びに漢字に関する規定削除の趣旨」を出し、地方長官に向けて改正の趣旨の説明を行って、歴史的仮名遣いの使用を言明している。

14 『国定教科書二十五年史』一九二八（昭和三）年八月国定教科書共同販売所 菊池大麓文部大臣の演説は一七〇三〇頁に引用されている。また同じ本の一〇頁には、懸賞募集に関して、「明治二十年には歴史編纂趣意書を出し懸賞によりて其編集を募集せられしが神谷由道著作之に当選し高等小学歴史と題し文部省に於て之を出版せられたり」という前例があつたことが記されている。

15 一九〇六（明治三九）年一月一六・一七・一八の三日間にわたり「官報」に「新体詩懸賞募集」の広告が出された。締め切りは二月二八日で、最優等には金二〇〇円から三〇〇円以内の賞金が用意されていた。審査報告は、同年四月一三日の「官報」に載せられている。それによれば八三九の応募があり、最優等には金崎賢の作品が選ばれ二〇〇円の賞金を与えられている。同じ誌面には、最優等を含む七つの「新体詩」も掲載されており、「之ヲ教科書ニ掲載スルニ当リテハ多少ノ修正」をするという注記もある。明治四四年度から使用された『高等小学読

本』の巻二第二七課には「進取」と題した韻文教材が載っており、進取の氣質を奨励する内容ではあるものの、どの応募作とも類似しておらず、文量も半分になっていた。この時の公募は、読本の教材に直接有効活用されたようには思えない。

16 一九〇七（明治四〇）年二月四日・五日の二日間にわたり「官報」に「物語懸賞募集」が出された。同年四月九日の「官報」には「懸賞募集物語審査報告」が掲載され、最優等に武田穎（金二〇〇円）、次点に市川鉄太郎（金一〇〇円）、佳作に一二名が選ばれている。

17 『教訓仮作物語』文部省編 国定教科書共同販売所刊 一九〇八（明治四一）年三月、なおこの本は『名著復刻 日本児童文学館第二集』ほるぷ出版として復刻された。

18 一九〇八（明治四一）年六月一〇日・一一日の二日間にわたり「官報」に「新体詩懸賞募集」が出された。同年一月二二日の「官報」には「懸賞募集新体詩審査報告」が掲載され、二二首の口語体や文語体の「新体詩」が選ばれている。この時の「新体詩」の公募で、第二期国定読本『尋常小学読本』に教材化されたものに、石原和三郎の「こうま」（巻三第九課）「はいしい、はいしい。あゆめよ、小馬。山でも、さかでも、ずんずん あゆめ。おまへがすすめば、わたしもすすむ。あゆめよ。あゆめよ、足おとたかく。……」があり、これは第一

期国定唱歌教科書『尋常小学唱歌』の第二学年用にも楽譜とともに載せられている。また 前田純孝の「時計の歌」（第四卷第一五課）「時計は朝から かつちんかつちん」も同様に『尋常小学唱歌』第二学年用にある。

この時の入選作で、もつとも有名な教材（唱歌）は、『尋常小学読本』巻一一第六課の「我は海の子」であろう。『尋常小学唱歌』第六学年用に掲載されて、今日でも親しまれている。投稿者は、宮原知久（宮原晃一郎）。武内喜久雄『唱歌・童謡120の真実』二〇一七（平成二九）年三月 ヤマハミュージックメディア 四〇〜四一頁。

19 巖谷小波『袖珍名家文庫』第二〇篇 我が五十年』東亜堂 一九二〇（大正九）年六月 二六〇〜二〇一頁。

20 『日本口演童話史』文化書房博文社 一九七二（昭和四七）年 一六頁、の「巖谷小波」の項。（内山憲尚、執筆）  
21 三浦佑之『浦島太郎の文学史』五柳書房 一九八九（平成元）年一二月、林晃平『浦島伝説の研究』おうふう 二〇〇二（平成一四）年一月、など。

22 『読み方教授』一九一六（大正五）年刊。『芦田恵之助 国語教育全集7』明治図書 一九八八（昭和六三）年にも収録。この芦田恵之助の「冬景色」の授業記録は、垣内松三の『国語の力』一九三二（大正一一）年・不老閣刊、に引用紹介され、センテンスメソッドの典型的な授業として評価されて有名になった。